

氏名(本籍)	しの はら りょう じ 篠原亮次(東京都)			
学位の種類	博士(医学)			
学位記番号	博甲第5842号			
学位授与年月日	平成23年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	養育者の「ほめ」意識および行動が幼児期の社会能力発達軌跡に及ぼす影響に関する研究			
主査	筑波大学教授	博士(医学)	朝田	隆
副査	筑波大学准教授	博士(学術)	高橋	秀人
副査	筑波大学講師	博士(医学)	大戸	達之
副査	筑波大学講師	博士(医学)	藤代	準

論文の内容の要旨

(目的)

乳幼児期における社会能力発達の様相やその軌跡、また親子のかかわりから得られる「ほめ」意識や行動に関する定量化およびそれらの影響を検討した縦断的先行研究はない。それだけに縦断研究による観察実験から幼児期の社会能力発達軌跡を明らかにすることは意義深い。一方、幼児期の「ほめ」に関する大規模な観察実験は少なく、特に子どもの社会能力軌跡との関連をみた研究はない。そこで、本研究は乳児期(4、9か月時)の母親の「ほめ」意識及び幼児期(18か月時)の母親の「ほめ」行動が、18か月から42か月の幼児の社会能力発達軌跡パターンに与える影響を明らかにすることを目的に本研究を行った。

(対象と方法)

対象は、JSTプロジェクト「日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明」に登録された子どもとその養育者である。リクルートは、大都市地区および大都市近郊地区の2か所で行い、計498名から参加同意を得た。

出生時から医師診断により発達上問題のない健常児を対象とし、正常発達の推移を検討している。幼児期の社会能力について、対象児が18か月、30か月、42か月時に、母子のかかわり場面を設定し観察データを得た。

母子かかわり場面の課題内容とは、積み木をある高さまで積み、そのあとの積み木の片づけまでを含む。初めに観察者が積み木の箱を机に置き、課題の完成見本を養育者に提示し、「お子さんに積み木でこの見本と同じものを作ってもらいます。お子さんひとりでは難しいと思いますので、お母さんが普段通りのやり方で教えてあげてください」と教示する。その後、観察ブースには母子のみが残り、母子による課題終了及び積み木を箱に片づけまでをビデオテープに記録する。観察時間は、連続して約5分である。観察ブースは縦横約4m、約16m²であり、カメラ6台、机と椅子が設置されている。

(結果)

各属性に関して、性別では男女比が約半数(男児51.3%、女児48.7%)、兄弟の人数では0人が約51%を

占めており、一人っ子が多かった。また家族構成は核家族が約 85%、母親の年齢は 30 代が約 70%、母親の職業の有無は「あり」が約 52%、経済状況（年収）は 200 から 400 万円が約 44%、保育サービス利用の有無は、「あり」が約 62% であった。

養育者の「ほめ」意識および行動に焦点をあて、子どもの社会能力との関連および影響分析を実施した。その結果、養育者の「ほめ」意識および行動が 18、30、42 か月に及ぶ子どもの社会能力発達軌跡の高安定推移に影響することを明らかにした。

（考察）

本研究では、4 年間にわたる追跡調査において、育者に対する記名自記式質問紙調査、母子相互作用の観察実験を追跡的に実施した。養育者の「ほめ」意識および行動が子どもの社会能力発達軌跡の安定化に寄与することを明らかにした。このように「ほめ」の効用を示唆した点で大変意義深いとともに、幼児期の社会性発達を捉える基礎研究として意義深いと考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究の作業仮説は以下の 3 つである。「1. 社会性の発達軌跡パターンはおおよそ低推移、高推移に分離する発達の特徴を持つグループが存在する」「2. 乳児期のベースラインにおける養育者のほめ意識は後の社会能力に影響する」「3. 乳幼児期のベースラインにおける養育者のほめ意識及び母子のかかわりの中での実際のほめ行動の生起が、その後の社会能力発達軌跡に影響する」。そして 4 年間にわたる追跡調査から、これら仮説の検証をおこなった。

その結果、まず仮説 1、2 を確認した。次に養育者の「ほめ」意識および行動が 18、30、42 か月に及ぶ子どもの社会能力発達軌跡の高安定推移に好影響を与えることを明らかにした。

本研究では、幼児期の社会能力に関して、縦断研究からその発達経過の特徴を把握し、また「ほめ」の影響を示唆した点で意義深い。また本研究は幼児期の社会性発達を捉える基礎研究としても価値を持つと考えられる。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。